

Title

# 「3 + αの利他」：NHK 連続テレビ小説「おかえりモネ」をめぐって

Name

木内久美子

「誰かの役に立ちたい」——「おかえりモネ」の主人公・永浦百音（ももね）は、何度もこの言葉を口にする。この言葉は視聴者にどう受け取られたのだろうか。辟易する人もいれば、共感する人もいただろう。とはいえ、少なからぬ人が百音と同じように感じていることは事実だ。だが、なぜそう感じるのだろうか。それは「役に立つ」ことがよいとされる社会の価値観と関係しているのだろうか。それとも道徳的なものだろうか？ それとも直感的な欲求なのだろうか。こういう問いは、学問的に立てられてきた問いではある。だがあまり考えすぎると行動できなくなるし、特定の文脈を離れて「役に立つ」ことを一般化し始めると、それがマニュアル化されて一人歩きを始めてしまいかねない。

「役に立つ」ことを計画しようとするのは奇妙だ。だが「役に立つ」という表現はその前提を内包している。つまり実際に「役に立つ」ことは、「立つ」べき「役割」を前提としている。その上で「役割」を作動させる場を探す、つまり「動く」ことが必要になり、その場で「役割」を果たすことが想定されている。

だが興味深いことに、一度そのような場が見つかったら、「誰かのため」は具体的で特定の「xのため」になり、その付き合いのなかで、事前に想定されていた「役割」はどんどん変転していく。私はたんに「役に立ち」「役割を果たす人」から、その人と場を共にし、その都度やってくる出来事に向き合う人、そこに「居る」人になっていく。「おかえりモネ」はこのような利他のありかたについて考えさせてくれる。

「おかえりモネ」では、永浦百音（清原果耶）の故郷、宮城県気仙沼市の亀島（実在する大島がモデルとなっている）がドラマのベースになっており、2014年春（百音は高校三年生）から2020年1月までの主人公の人生が描かれている。ただし最終回のみ2022年の夏に設定されており、その時点でコロナ禍は収束している。興味深いことに、この物語のナレーションは、百音の亡き祖母・永浦雅代（竹下景子）という設定である。

このドラマの背景には2011年3月11日の東日本大震災があり、登場人物たちにその記憶が度々フラッシュバックする。百音にとって優しい家族と幼なじみに囲まれた暮らしは幸せなものだったが、百音は震災以降、その日に「島にいなかったうしろめたさ」「[島にいた人々と]痛みを分かち合えない苦しさ」そして「なにもできなかった」という無力感に苦しめられている。このような状況にあって百音は高校卒業後、島を出ることにする。物語はこの時点から始まる。

ドラマは三部構成で、百音の活動拠点に応じて場所が変わる。第一部の舞台は宮城県登米市。百音は高校卒業後、亀島を離れ森林組合で働いている。やがて気象予報士を志すようになり、三回目の受験で試験に合格する。第二部

の舞台である東京では、気象予報士として報道気象にかかわるようになり、地元密着型の気象予報の必要性について考えるようになる。第三部では故郷の気仙沼に戻り、地元密着型の気象ビジネスを生み出そうと奮闘する。百音と亀島にいる家族や友人との絆は深く、ドラマの全篇をとおして亀島が登場する。

#### ・痛み：「3 + α」から生ずる気遣いの共同体

連ドラというと、ヒロインの人生にフォーカスするのが定型だが、このドラマでは、必ずしもそうではない。ここでは複数の人が「痛み」を抱え、互いを気遣うという「痛みの共同体」が描かれている。

もちろん主人公の百音の心の痛みは特に細やかに表現されている。例えば震災前までは仲の良かった妹・未知（蒔田彩珠）とのわだかまりが丁寧に描写されている。「お姉ちゃんは、津波みてないからね」という言葉は、島の住人としては当事者であるにもかかわらず百音をその共同体から排除する力として働き、疎外感に拍車をかける。この言葉が、フラッシュバックされる時、いつでも百音は沈黙する。この沈黙が百音の痛みを表現している。

だが実は未知も苦しんでいる。未知は震災の日に家に祖母を置いて一人で逃げてしまった自分を責め、地元に残ることでその罪を償おうとしているが、この葛藤を誰にも打ち明けられないままである。地元の水産高校に進学し、種牡蠣について研究している未知を、百音は尊敬している。実家の稼業や地場産業の発展に役に立つことをしている妹と比べて、自分にはやりたいことが見つからないからだ。

痛みを語れない人は他にもいる。百音を慕っている亮（永瀬廉）だ。震災で母を失い、その悲しみからアルコール依存症を発症した父親・新次（浅野忠信）と住んでいる。父親は立派な漁師だった。自分がそのあとを継ぎ、それが父が海に戻るきっかけになればいいと、漁師を志している。百音も未知も亮を気遣って声をかけるが、亮はいつも「大丈夫」だと笑っている。

近しい人の気遣いに応えられない苦しみは、津波で妻・美波（坂井真紀）を失い、アルコール中毒に苦しむ亮の父・新次に体現されている。百音の父・耕治（内野聖陽）は幼なじみの新次をなんとか助けようとするが、新次はその気持ちを受け取ることができない。「俺は立ち直らねえよ。絶対に立ち直らねえ」——新次にとって、立ち直ることは美波の死を認めることだ。受け取られない気遣いは、「人の役に立つ」ことの難しさを際立たせる。

だが「おかえりモネ」の登場人物は、それでも互いを気遣うことを止めない。なぜなら各々が語れない痛みを抱えていても、同時に、苦しんでいるのが自分だけではないことを知っているからだ。心の痛みはしばしばそれを感じている主体と同一化し、「他の人には分からない」という感情とともに、その主体を自己の要塞に閉じ込める。だが、このドラマでは、そうではない。苦しんでいる他者への想像力が、他者の「痛み」に気遣いを向けさせる。その気遣いは一人一人を「痛みの共同体」とでも呼べるものにつなぎとめる。

この共同体は視聴者にも差しだされる。登場人物の心の痛みの原因となっている記憶は、線的な物語として語られるのではなく、断片的で反復的なフラッシュバックによって示される。その手法ゆえに、視聴者は登場人物の痛みの内容を理解するというよりは、身体感覚として体感させられるのである。言葉では説明がつかず、やり場のない感情。こうしたものを、私たちの多くはどこかで一度は経験している。視聴者は登場人物の沈黙に接することで、自らの心の痛みとの共鳴を感じる。

共鳴は追体験ではない。私たちは他者の痛みを同じように体験することはできないし、完全に分かることなどありえない。だがその体験を見聞きすることで触発され、相手の立場に立とうとし、あるいは自らのこととして引き受け直すことはできる。また相手の痛みを、外部から言葉を与えてみることもできる。もちろんこの言葉が、痛み

を感じている主体に直接影響したり、その応答を引き出したりするとはかぎらない。だが、言葉は様々な人々を巡って、痛みの共同体の境界を拡張していく（村上, 2021, p.239）。「おかえりモネ」では、震災の当事者でない人が百音の痛みの伴走者となり、それによって自らの痛みに向き合う力を与えられた百音が気仙沼に還り、他の人々の痛みに伴走する立場に立つことになる。絶えることのない気遣いが、新次のように絶望する人をも痛みの共同体につながる。内発的に回復の糸口を見出す時間を与える。

・「誰かの役に立ちたい」と利他

百音は自らの無力感と向き合うなかで、「誰かの役に立ちたい」と感じ、実際そのことを折に触れて言う。だがこのセリフはこのドラマでは両義的なものだ。それは一方では、百音に生きる目的を与えてくれるものだが、同時に自分の無力さや痛みと向き合うための、自己肯定の手段になっているともいえる。「助けていると感じるために」行動する——この喜びは、利他的というよりは利己的である。

幸いなことに、「誰かの役に立ちたい」というセリフにたいして、物語のなかで反論してくれる人はたくさんいる。なかでも後に百音の婚約者となる医師の菅波幸太郎（坂口健太郎）の指摘は鋭い。「あなたのおかげで助かりました」という言葉は「麻薬」だ。それがあなたの実力なのだと言えない。「深刻な問題に対処するには、当事者ではない人間のほうが、より深く考えるべきだと思う」。また菅波は、他者の痛みの分からなさにも誠実である。「あなたの痛みは僕には分かりません。でも分かりたいと思っています」。痛みを分かることはできないが、聴くことはできる。どこがどのように痛いかを言えるだけでも、当事者は少し楽になるのではないか。

「聴くこと」はドラマの全篇を貫くテーマの一つだ。百音は一貫して「聴く人」であり、「聴く」ことで、自らの無力感と闘う術を見出ししていく。第一部の登米編で出会う下宿先の新田さやか（夏木マリ）や気象予報士で東京編では職場の上司となる朝岡悟（西島秀俊）に出会い、他者の言葉を信頼して受け取るだけでなく、自分の言葉を相手に委ねることも学ぶ。また百音自身は、他者の声を聴くだけでなく、それに即して動くことを実践していく。具体的で特定の他者と接し関係を結ぶなかで、「役に立つ」の「役割」を想定するまえに、状況に関わってしまった自分気づく経験もする。

「誰かの役に立ちたい」という言葉は、全篇を通して繰り返される。だが視聴者は、その内実が少しずつ変わっていくこと、また物語の最後には百音がこのセリフを必要としなくなっていくことに気づいているだろう。

この変化を示す例は複数あるが、なかでも重要なのは第19週「島へ」のエピソードだ。台風の影響により百音の祖父の牡蠣棚が大きな被害を受ける。その知らせに動揺した百音は東京から気仙沼に向かうが、実際に行ってみると家族や友人が楽しそうに集まって牡蠣をむいたり、片づけたりしていた。何のために来たのかと、百音は自問する。自分の助けなど必要としている人はいない。自分の「役割」はここにはない。百音は玄関のかけで涙をこらえる。だがここにいるのは「誰かのため」ではない。自分の無力感に立ち向かうためなのだ。そうしてくれた菅沼の言葉に背中を押されて、百音は家族や友人に交じって作業に加わる。そしてこの経験をとおして、「ただそこにいたい」「一緒になにかやりたい」と思えたことを素直に喜べるようになる。「役に立つ」から「一緒にいる」への発想の転換。この転換は、百音に亀島に戻ることを決心させ、これが第三部の気仙沼編で、周囲の人々の心の痛みを聴きながら、みずからの痛み言葉を与えることにつながっていく。

・誰かが（聞いて）いる：利他的環境

この物語では「聴く - 聴かれる」の場は、一方的な関係ではなく、かといって二者に閉じられた双方向性だけでもない。そうではなく、誰かのいう言葉がその聴き手として想定されていない人にも聞こえている場である。プライベートがないといえばその通りだが、「おかえりモネ」では、それが肯定的に描かれている場面が多い。

たとえば登米の森林組合事務所では、地元の人たちが、半ば野次馬的ではあるが優しく百音と菅波の恋の行方を見守っており、そのことに二人は気づいている。東京の百音の職場はオープンスペースで、百音が一人でいることはあまりなく、その空間のおかげで同僚と接する機会があり、信頼関係が構築されていく。また百音の職場で、百音の父・耕治と朝岡がたまたま鉢合わせ、朝岡が耕治に個人的な話をする場面に百音が偶然に居合わせる場面がある。このような場面を気まずいと感じて、見なかったふりもできるのだろうが、百音は朝岡にこのことを臆せず話す。

このような百音の「居合わせる」ことへの抵抗感の少なさは、永浦家の家屋とも無縁ではないだろう。母屋には複数の部屋と台所があるが、部屋を区切るふすまは開いており、家にいればお互い姿は見えなくても、その声で様子がうかがえる。新次と耕治が居間で話していることは、台所にいる百音の母・亜哉子（鈴木京香）や祖父の龍己（藤竜也）にも聞こえている。そしてこの結果、亜哉子が家族には秘密で、新次をアルコール依存症の治療のために病院に連れて行くことになる。物理的にも永浦家は開かれている。百音の友人は気軽に家を訪れるし、時にはその家出の逃げ場にもなる。そのようにやって来る人々を、耕治や亜哉子はガラス窓から眺め、状況を察する。積極的な介入はしないが、ただ見守っているだけでもない。そこには不思議な場のバランスがある。

永浦家と平行な存在として、ドラマで重要な役割を果たしているのが、百音が東京で住んだ銭湯つきのシェアハウスである。そこにはコミュニティールームがあり、百音の幼なじみでシェアハウスに住んでいる野村明日美（恒松祐里）だけでなく、菅波や百音の職場の同僚、亀島の家族・友人など、様々な人が出入りする。

そしてこのコミュニティールームには、大概の場合、大家の井上菜津（マイコ）が居合わせている。菜津はほとんどの場合、何も言わないが、それとなく話を聞いている。この場所は個人的な悩みを打ち明けたり愚痴を言ったりする場所になっているが、そこに集う人々は、当然、菜津の存在を承知のうえで話しているわけである。ここには場への信頼があるとあってよい。

そして「聴く人」である菜津は、あるときこのドラマのどの登場人物よりもこの物語の本質を言い当ててみせる。百音の同僚の神野マリアナ莉子（今田美桜）が、仕事がうまくいかずに悩んでいるとき、その原因は百音のように「傷ついた経験がない」からではないかと百音に申し訳なさそうに言う。その話を聞いた菜津は、唐突に話に加わる。「傷ついてる人の方が強いなんて、そんな…。そんなことは言っちゃダメ。傷ついていいことなんてない。(…) 傷ついてほんとうに動けなくなってしまう人もいるから。(…) 何もなくてもいいじゃない、そこにいっただけで。どんな人もいっただけでいいじゃない。そこにいてくれるだけで」。

このセリフは莉子への反応であるとともに、菜津の幼なじみで就職を機に引きこもりになってしまった宇田川（キャスト名は非公開）への暗示である。菜津は宇田川のように社会的に「役割」を持たないひとでもいいではないか、と肯定しているのである。持たざる者の肯定——これは莉子だけではなく、「役割」があるからいられるという発想にたいするアンチテーゼでもあるだろう。このセリフは、「役に立つ」から「居る」に移行していく百音の物語を予言している。



・「何かの役に立つ」と利他

「誰かの役に立ちたい」という百音の思いは、しばしば彼女が幼少時代に龍己から言われた言葉と連動してフラッシュバックする。「山は海とつながってるんだ。なんも関係ねえように見えるもんが何かの役に立つっていうことは、世の中にいっぺえあるんだよ」。

百音は「役に立つ」という言葉から祖父のセリフを想起するが、気をつけなければならないのは、このセリフの主語は人為の意図を超えた自然の生態系であるということだ。自然の営みは、種や個体においては生命を維持するための戦略に則っており、人間のように自らの利益を差しおいて「誰かの役に立つ」ことは想定されていない。だが生態系のサイクルのなかで、長い時間をかけて、生存戦略として生物間の相互依存的関係が育まれていくことは事実だ。その事象が、人間から見ると「何かの役に立っている」と理解されるのである。

龍己が漁師であるにもかかわらず植樹を続けているというエピソードは、気仙沼で牡蠣養殖を営み文筆家でもある畠山重篤さんの『森は海の恋人』（1994）や『鉄で海がよみがえる』（2012）と重なる。昭和40年代に畠山さんは気仙沼湾の赤潮を目の当たりにし、直感的に植樹を思いついた。そのとき植樹がどのように「役に立つ」のかを詳しく考えてはいなかった。この活動を始めたときは、周囲の人々から植樹を不思議がられたという。だが気仙沼湾にそそぐ大川の上流に計画された新月ダムの建設中止のために奔走するなかで専門家と出会い、森の枯葉が腐葉土化し川に流れ込むときに、海を豊かにするフルボ酸鉄が水に溶けて海に流れ込むと知ることになった。ある目的にたどり着こうとして、偶然に別の事柄への扉が開け、結果、別々だった糸がつながることもある。「なんも関係ねえようなもの」が「何かの役に立つ」ことは、自然という他者に関わる過程で、人間が偶然に発見する生命の連関なのだ。これは自然の擬人化ではある。だが文明化によって自然との接点を失ってきたなかで、人間は擬人化を通して、あらためて自然とのかかわりを結び直すことができるのかもしれない。気象予報士とは気象という自然現象を人間の立場から理解し、天気を予測し危険を予知する職業だ。百音にとっては「人の命を救う」職業である。だが自然現象は人間のコントロールを超えたところにあり、気象予報士の予測ではどうにもならないこともある。「祈るしかないときもある」——そう上司の朝岡はいう。台風一過の気仙沼で壊れた牡蠣棚を片づけていた人々は、そのような自然と、ともに生きることを知っている。龍己の言葉は百音に伝えているのは、「役に立つ」ことが、自然においては長い時間をかけて育まれる営みであるということではないだろうか。

このように言葉が巡る「おはようモネ」の物語は、その終盤で心の痛みの寛解、和解を経て、登場人物たちの新たな出発点にたどり着く。百音は気仙沼から東京に旅立つ未知を見送り、亮は自分の船を手に入れ、耕治は銀行員をやめて牡蠣の養殖業を継ぐことを決める。他方、百音の居場所はすでに気仙沼にある。「もう何もできないなんて思わない」——最終回で百音はあの無力感に戻るものかと宣言する。

ドラマの最終回のみが2022年の夏に設定されている。最後のシーンは浜辺だ。百音は母親が世話をする子供たちと一緒に浜辺にいる。皆が片づけて浜辺を去ろうというとき、不意にカットが入り、今度は百音が一人で浜辺に向かってたたずんでいる。先ほど肩に下げていた鞆は消えている。この二つのカットの時間関係がわからなくなる。これまで時系列的に語られた物語の線的な時間が、急に宙づりにされているかのようだ。そこに息を切らせた菅沼がやって来る。菅沼は言う。「僕たちは違う時間を生きているかのようだ。二年半会っていない」。百音はこう続ける。「私たちには時間や空間の違いは関係ありませんから。先生、本当におつかれさまでした」。

ここで菅沼がコロナ禍で医療に従事していたことが視聴者に示される一方、二人の時間の感覚の違いが示される。「違う時間を生きている」という菅沼は、会えなかった二年半の時間が二人を隔てていたと感じているのにたいし、

百音は「時間や空間の違い」は関係ないという。百音にとっては、菅波は離れていても、身近に声が聞こえていた人、傍に居続けてくれていた人、ということなのだろうか。あるいは、海という人間よりははるかに長い時間存在する自然を前にした百音のセリフには、死者の存在も重ねられているのかもしれない。死者には時間や空間の違いはない。生者がその存在を感じ続けることで、死者にその死を生き延びさせている。ナレーションの祖母の声はそのような死者なのだろう。このような神話的な時間の到来を示唆して、「痛みの共同体」の輪は閉じられる。

心の痛みに留まることなく、他者を気遣うこと。多方向に開かれた「聴く - 聴かれる」の場では、その気遣いが、ときにその気遣いとは無関係の第三者の心の痛みの扉を開く契機にもなるということ。「誰かを助けたい」から「居る」ことへの発想の転換。このように利他という視点から「おはようモネ」をまとめてみると、まずは心の痛みに向き合うには、居場所や他者が必要だということになるのかもしれない。幸い百音は、島に居場所がなくなったとき他の場所に動くことができ、その場を居場所にすることができた。だが心に痛みを抱えながら、居場所が見つけれない人、そもそも心の痛みという場所から動けなくなっている人もいる。そんなときは、直接面識がなくてもよい、自分ではない他者、特定の「誰か」をあえて気遣ってみてもよいかもしれない。その人の立場から、どう苦しんでいるのかに想像を巡らせること。こうして自分の痛みから少し離れて、「聴く」場をつくってみる。それが結果的に、自分自身に対する気遣いとして、どこからともなく届けられていた、そう気づくときも、もしかするとあるのかもしれない。少なくとも私たちは知らないうちにそのような贈り物を受け取っていることを、「おかえりモネ」の世界は示している。

NHK 連続テレビ小説「おかえりモネ」

原作：安達奈緒子、製作：日本放送協会、2021年5月7日～10月30日（全120話）

## 【引用文献】

村上靖彦 2021『交わらないリズム 出会いとすれ違いの現象学』青土社